



# 碧南ロータリークラブ週報

第2708回例会 平成26年10月22日

- 会長 石橋 嘉彦
- 幹事 伊藤 正幸
- 会場監督(SAA) 清澤 聡之

2014-2015年度 国際ロータリーのテーマ

- 例会日 毎週水曜日 12:30
- 例会場 碧南商工会議所ホール
- 事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町 90
- TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100
- ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp>
- E-mail: [info@hekinan-rc.jp](mailto:info@hekinan-rc.jp)

- 会報委員 奥津順司・藤関孝典・岡本彰人



## ●斉 唱

ロータリーソング「ロータリー讃歌」

## ●本日のメニュー

秋のお弁当 小伴天

## 会 長 挨 拶

いよいよ秋本番でございます。この時期は、一雨一度という事で、雨が降る毎に気温が一度下がるという時期でございます。

先日の10月10日は東京オリンピックから50年、その時日本は大いに盛り上がりオリンピック一色になった記憶がよみがえります。その前に検討されたのが観客の輸送手段の問題

でした。日本にとっては初めての国際的なイベントです。そこで検討されたのが新幹線計画でした。この高速鉄道計画は、昭和13年に弾丸列車計画として検討され、昭和16年に工事が開始されましたが、太平洋戦争のために2年後に中止となったわけですが、昭和32年に当時東京オリンピックが昭和39年に予定されていたため、工事の再開が決まりました。昭和34年4月に着工し、昭和39年10月に東京-大阪間を開通させました。

建設屋としてこの時代に500kmの鉄道を5年で開通させる事は、至難の技といわざるを得ないし、高速運転による安全確保という面でも細心の注意が払われ、半世紀の間死亡事故0である事はすばらしいと思います。

昨年遅延時間を平均すると54秒で一日乗客数42万人です。これぞ日本の技術の真髄です。摩擦利用の走行では、そろそろ限界になってきているので、時速500kmでの安定走行はリニアモーターカーが導入されます。

2020年の東京オリンピックには間に合いませんが、2027年東京-名古屋間を40分で結ぶ夢の超特急、乗ってみたいものです。



石橋嘉彦会長

## 幹 事 報 告

本日は3点ほどご報告させていただきます。

- ・ 他クラブの例会変更などは幹事報告書の通りでございますので、ご確認をお願い致します。
- ・ 本日第1回指名委員会を例会終了後102号室にて開催させていただきます。委員の皆様にはご出席の程よろしくお願い致します。
- ・ 11月1～3日のWF Fのメーキャップについてです。メーキャップ受付は、会場もちのき広場の本部付近に2箇所と、噴水広場に1箇所の計3箇所でメーキャップができます。時間は、午前10時から午後5時までとなっております。メーキャップカードが頂けます。



伊藤正幸幹事

## 委 員 会 報 告

### <出席奨励委員会>

総会員数 68 名 (内出席免除者 17 名の内出席者 9 名)出席者 52 名	
出席対象者 52/60 名	出席率 86.67%
欠席者 16 名(病欠者 0 名)	前々回修正出席率 100%

※三週連続出席率 100%の場合は記念品を差し上げます。

### <ニコボックス委員会>

- 石橋 嘉彦君 石川春久さんお帰りなさい。今後ともロータリー、よろしくお願い致します。
- 伊藤 正幸君 先週の職場例会、皆様の御協力ありがとうございました。職業奉仕委員会の皆様、親睦活動委員会の皆様、ありがとうございました。
- 石川 春久君 お久しぶりです。よろしくお願い致します。
- 清澤 聡之君 大浜てらまち前夜祭、盛況に開催できました。
- 大竹 密貴君 10月19日(日)の大浜てらまちウォーキングでは、黒田昌司様のもとで実行委員長を務めさせていただきました。黒田様、RCメンバーの方をはじめ、多くの方々のお力添えにより、無事に務めさせていただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。
- 荻谷 賢治君 2人目の孫ができました。

「私の履歴書」

杉浦秀延君



杉浦秀延君

今年の2月に入会したばかりの、杉浦秀延でございます。卓話という事で大変恐縮しております。ありのままをお話させて頂こうと考えております。

私は昭和34年5月に棚尾に生まれました。翌年に死にかけております。今の私がいるのは、今までの場所場所において色んな方に助けて頂いたおかげだと思っております。当時、手遅れの鼠径ヘルニアと言われ、第13代碧南RC会長の小沢先生にオペをして頂きました。小沢先生は、おじいさん、おやじを看取って頂いた忘れる事のできない先生でございます。

中学までは図体はでかいが体は弱かったです。一度風邪をひくと一週間ぐらい熱が下がらないぐらいひどい状態でした。中学の時は特殊学級の吉見先生にみて頂き、社会は吉見先生に教えて頂きました。歴史は実際にそこに行って学ぼうという教えの方でした。

高校は地元の碧南工業高校へ行き、バレー部の先生にバレーで鍛えないかと誘われ入ったのですが、あまりの体力のなさについていけず、先生にバーベルをもらい、家で鍛えなさいと言われ、2年間鍛えまして、2年生の時には初めて1年間欠席なしでした。高校時代は勉強はできませんでしたが、体力は先生のおかげで人並みにつける事ができました。

大学ですが、当時、碧南工業高校の歴史は浅く、私立の推薦をもらう事はできませんでしたので、中部大学を受験し、入学させて頂く事になりました。父親に相談し下宿させて頂く事になりました。家事をやるようになり、母親のありがたみが分かるようになりました。

大学に南山大学出身で英語専攻の山田先生という方がいらっしゃいました。ご自身の研究はイギリスの文学的な事をやられてまして、中々機会がなく出会う事はできませんでした。40歳を過ぎた頃に山田先生が名古屋キャンパスで社会人講義をやるという事で、やっと念願の山田先生の講義が受けれるなと思いました。

今まで多くの方と出会いましたが、多くの先生方に助けて頂き、今の私があると思っております。高校では体力をつけて頂きました。大学では大きな成績を残す事はできませんでしたが、4年間続けたのは大きな節目かなと思っております。

中学1年の時、初めて神楽笛をやらないかというお話を頂きまして、それが発端で色々な繋がりができております。春にもご披露させて頂きましたが、あくまでも私は初心者でございますので、色々勉強しなければいけないと思っております。

私にできる事はおっしゃって頂ければ尽力させて頂きたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

## 貝田隆彦君



貝田隆彦君

どうして名工大機械科出の僕が葬儀屋になったかと言いますと、単純に葬儀屋の家に生まれたからです。長男の兄は産婦人科医であります。葬儀屋の長男が医者になってしまったせいで、次男である僕が継ぐハメになってしまいました。

2歳上の兄は、小さい頃から成績が優秀でありましたので、周りの大人達は「兄は頭がいいので自分の道を進めるから、そこそこのお前が葬儀屋を継ぐべきだ。」と言っていたように記憶しております。

小学生の頃は周りの期待に応えるかのごとく、そこそこであった私は何事にも無気力であったように思います。どうせ葬儀屋なんだ、という気持ちが無気力な自分を招いたようでした。

そんな自分に転機が訪れたのは中学校に上がった頃の数学の小テストでした。小学校の算数だけは人並み以上の成績できた私は、その小テストで1番でした。自分はもしかしたらやれば出来るかもしれないと思った私は、それから勉強を頑張るようになりました。学校での成績が良くなってくるとそれが自信となり、心の支えになっていったように思います。

葬儀屋という仕事柄、あまり家族揃っての旅行に行った記憶のない私は、葬儀屋という仕事が好きではありませんでした。兄貴のように自分の道は自分で開こうと決意した矢先に兄が現役で医学部に合格してしまいました。こうなってしまうと、自分が家業の葬儀屋を継がなくても周りに理解してもらうには医者になるしかないが、自分にはそこまでの頭がないと思いました。そう悟った私は真剣に勉強するのをやめてしまったように思います。

将来何になりたいかも考えずに、世間体と文系の科目より理系の科目の方が点数が取れたというだけの理由で大学受験をしてしまいました。

大学に入学してすぐに実験と製図が嫌いな自分はエンジニアには向いてない事に気づかされました。この段階で初めて葬儀屋になるしかないと思うようになりました。

大学の学業での目標を失った自分ではありましたが、学生の頃しか出来ないであろうワンダーフォーゲル部に入り、山登りに没頭しました。あまり運動をしてこなかった私には初めのうちはとても大変でした。今の自分にはワンゲルしかないと考えていたので、同期が数人辞めていく中で最後まで残り、40人の部員を率いるキャプテンになりました。今思えば人生で一番楽しい4年間でした。

楽しかった学生生活が終わり、いよいよ葬儀屋人生の始まりです。仕方なく始めた仕事だったので、嫌で嫌でしょうがなかったです。修行という名のもとに、名古屋の葬儀屋さんに勤める事になった私は、学生と職業人というギャップに大いに悩まされました。誰でもできるような荷物運びしかやらせてもらえない、やれない1年目は本当に嫌でした。

自分にはもっと違う人生を生きる権利があるのではないかと思いはじめ、仕事を辞めたいと思っていた頃にまた転機が訪れました。

2年目になった頃、ある小規模の葬式の担当者に初めてなりました。決して上手だとはいえない担当の仕事を終え、集金に行った時にそのお客様に、ありがとうございましたと言われました。お

金を頂いた上に、よくやってくれてありがとうと言われたあの感動が、その後の葬儀屋人生に大きな影響を与えた事は言うまでもありません。

これがきっかけで自分は葬儀屋でいいと思えるようになりましたが、問題は自分の会社で働いてくれる人です。イメージの悪さと休みが不規則な仕事のためにとっても求人に困りました。特に女性の従業員に困っていた時に、葬儀の花の仕事もしていたので、小売の花屋を隣に建てて花屋の店員で募集をかけたらずぐに充足されました。これでも根本的な問題である葬儀屋のイメージが良くなった訳ではありません。そこで考えた事が会館の建設です。会館の建設には大きなお金がかかりましたが、得る物も大きかったです。

会館の運営がどうにか軌道に乗り出した頃、また新たな問題が発生しました。

葬儀屋イコール会館業とイメージを良くしてきたのはいいのですが、イメージが良くなったために競合他社が一気に増えてしまいました。

仕事に貴賤の違いはないとは言いますが、でも仕事に対するイメージの違いがある以上、それに携わる者はイメージの向上に努めなければならないと思う次第であります。

## 次回例会案内

平成26年11月5日（水）

クラブフォーラム「改革 ～新しいロータリー財団」

地区ポリオ・プラス委員長 横井 定氏